

## 文教厚生常任委員会行政視察概要

令和 5 年 8 月 1 日（火）  
於 小 牧 市 議 会  
午後 1 時 1 9 分 ～ 午後 2 時 5 3 分

### 1 調査概要

「ICT教育について」

小牧市教育委員会 学校教育ICT推進室

小牧市では、政府が小中学生に1人1台端末を配布する「GIGAスクール構想」の以前より、タブレット端末の整備、ICT支援員の配置、指導者用デジタル教科書の利用などを進めてきた。確かな学力の定着を目指す、児童生徒同士・教職員同士による「学び合う学び」の実現のため、共通のビジョンが必要となったことから、平成30年度に「学校教育ICT推進計画」を策定した。

有識者や小中学校の教員で構成する「小牧市情報教育ICT推進委員会」において、各年度の取組状況について討議し、計画の進捗管理を行っている。そのほか、市内の小中学校25校から4校をICT教育パイオニア校として選定し、ICT機器及びソフトウェアを先行的に用いて、検証を行っている。



新型コロナウイルス感染症の流行により、人との接触の機会が減り、社会が変化する中、児童生徒の個別最適な学びと協働的な学びをさらに充実させていくため、令和3年度に第2次計画を策定した。第1次計画からは、特に「情報モラルの育成」「クラウドの利用を前提としたICT環境の整備」「学校休業非常時・緊急時におけるICTの活用」の項目が重要視されている。

## 2 主な質疑応答

問 ICT機器やデジタル教科書をどのように学校生活・授業で利用しているか、また、ICTを活用する際の考え方について

答 英語のデジタル教科書では、自分のペースで聞ける⇒「個別最適な学び」、聞きたいものを聞ける⇒「主体的に取り組み学習」、友人と分担して聞ける⇒「協働的な学び」という観点から、学習活動が充実していると考えます。

子供たちには、必要に応じて自らを成長させ、自らの力で時代を切り拓いていく力を身に付けさせたい。ノートや鉛筆と同様に、ICTはあくまで学びの道具である。ICTの整備状況や活用頻度ではなく、「ICTによって、どのような子供の力を伸ばすのか」ということが重要である。そのため、人と関わり合って、それぞれが学ぶと同時にお互いの良さを学ぶという「学び合う学び」を今後も推進していきたい。

問 児童生徒に対する情報モラルの教育について

答 デジタル・シティズンシップ教育を推進している。これは、利用を躊躇・制約させるといった禁止型の教育から、インターネットの情報が本当に正しいのかを子供たち自身が判断する力を養う、子供主体の教育を行うというものである。

道徳科において、チャットアプリを使ってリアルタイムに書き込みをし、SNS上での書き込みトラブル、いわゆる炎上を実体験する授業を行った。これは、自分の発言の責任について考え、正しくネットワークを利用しようとする気持ちを高めることを目標にしているもので、授業の振り返りの際に級友の意見をクラス全体で共有し、子供たちによる主体的な学習ができたと考えます。

問 ICTの利用に関する教職員へのフォローアップはどのように行われているか。

答 例えば、作文の授業の際に授業支援アプリを用いたことで、「教員による添削」「生徒同士による作品の読み合い」が手軽になった。このようなICTを活用した実践事例を集めることで、教職員が他校の取組状況を見たり、実際の現場でどのようにICTが使われているかを知れたりすることでき、横展開を可能にしている。

問 児童生徒・保護者の反応について

答 タブレット端末の日常化が進んでくることで、子供たちにとっては特別なことではなくなってきている。パイオニア校で、児童生徒・保護者にアンケートを実施したところ、「タブレット端末を活用した授業は分かりやすいと感じる児童生徒の割合」は、令和元年から4年にかけていずれも約80%となっている。また、「学校や教員は、ICT機器を活用して分かりやすい授業に努めていると思う保護者の割合」は令和元年の約47%から令和4年では70%となっている。

問 今後について

答 各パイオニア校において、いじめや不登校の早期発見・指導、特別支援教育、外国人児童生徒のための日本語指導について、テーマ別の研究・実践を行い、結果を取りまとめていく。

なお、来年度以降、端末の更新時期に入るが、更新する端末の調達について政府の予算がつくかは現時点では見通せず、自治体ごとに調達する場合における予算の確保が課題である。

以上